

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：34305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885108

研究課題名(和文)炭鉱労働者のエートスと安全意識：保安技術・防災システムの機能不全の社会的解明

研究課題名(英文)the safety awareness and ethos of coal miners

研究代表者

森久 聡 (Morihiisa, Satoshi)

京都女子大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：20736649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：飯島調査データのほとんどをテキストデータに変換し、飯島伸子が三池大災害について論じた文献・論文をもとにオリジナル調査の意義と限界を検討した。

『Coal Mine Safety Service』の1955～1965年分をデジタル化し分析した。事故の前後で大きな変化が見られなかった。戦後に起きた世界最悪の炭鉱事故にも関わらず、炭鉱の保安教育を扱う専門雑誌に目立った特徴が見られないのは何を意味するのか。また聞き取り調査では、歴史遺産を活用したまちづくり活動に携わる地元住民に聞き取り調査を実施した。現地関係者との信頼関係を構築し、今後も引き続き、調査に協力をしてもらえる関係を生み出すことができた。

研究成果の概要(英文)：I translated coal miner's oral data which was collected by Iijima Nobuko to transcript data. Also I reviewed some papers and books which were written by Iijima about an accident at Miike coal mine in 1963.

I analyzed text data of "Coal Mine Safety Service"(1955-1965) which was a journal for workers of coal mine. However the accident of 1963 was one of the tragicest accident, the journal said nothing about it. Also I interviewed some persons who were members of NGO for regeneration of local community.

研究分野：地域社会学

キーワード：保安技術 科学社会論 炭鉱

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の社会的意義

2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島原発事故は、日本の安全防災の在り方を根本から問い直す出来事であった。

それ以来、保安・防災・安全といった領域は、緊急かつ重要な課題として社会的関心を呼んでいる。とくに福島原発事故は、自然災害的な側面のみならず、地震発生時への予防的対策や発生直後での対応、そして原発の廃炉作業における災害すなわち被爆の防止など、さまざまな局面で保安・防災・安全の問い直しが求められている。そういった声の中には、東京電力の原発事故への対処の甘さなど東京電力という組織の構造的な問題への言及が多く含まれている。そこで本研究では、保安技術や安全管理などの防災にかかわる技術・システムがその機能を効果的に発揮できない要因には、防災の技術・システムを担い運用する組織や主体のあり方が深く関係していると考えるところからスタートする。そして三池大災害を事例に保安・防災・安全に対する組織内部の個々人の心構えや取り組み姿勢、そして個々人の意識の集合である組織文化といった社会的側面によって技術やシステムの機能的有効性が左右されることを明らかにする。

(2) 本研究の学問的意義

本研究に連なる研究動向は大きくわけると次の3つである。ひとつは、現在の環境社会学へとつながっていく労働災害研究である。環境社会学のパイオニアと称される飯島伸子は、研究者としてのキャリアの初期に、三池炭じん爆発CO中毒事故(三池大災害)の調査研究を行っている。飯島は三池大災害を労働災害の典型例として位置づけ、同じように熊本水俣病を公害問題として、薬害スモン事件を食品公害として捉えた。そして、それらを社会的災害として把握しようとした。後に飯島は社会的災害から環境問題へと視点を変化させていくことで、環境社会学の成立へと大きく貢献したのである。このような学問的展開のために、飯島による労働災害研究は環境社会学の源流の一つとされており、また自然災害の研究も災害社会学と重なり合いながら環境社会学においても展開されているのだ。しかしながら、労働災害研究は環境社会学において十分な蓄積がなされていない。

そしてもうひとつの研究動向は、労働研究である。炭鉱などの鉱という労働の現場に関する研究としては、村串仁三郎『日本の鉱夫

友子制度の歴史』や社会学では松島静雄の『友子の社会学的考察』など鉱山労働者の相互扶助組織である友子に着目した研究が有名であるが、労働災害を直接扱う研究はほとんどなされていない。さらにいえば、1960~70年代の工場内での事故や災害が多発した時代にあっても、それらへの被害補償や被

害者救済といった観点をのぞくと、保安・防災・安全を焦点にした研究は皆無である。近年では経営者・労働者ともに安全への意識が高まったため、工場や作業現場などの労働の現場における事故は大きく減り、過労死やサービス残業など事務系職種の労働災害に注目が集まりがちである。だが、工場や作業現場などの労働の現場における事故はゼロになったわけではない。むしろ福島原発事故やインドのボパール化学工場のように、事故や災害による被害が敷地の外部に広がり、大きな災害に発展するケースも存在している。その意味では、工場や作業現場などでの労働災害研究の現代的・社会的意義は失われていない。

そして3つめに科学技術社会論の系譜があげられる。科学技術社会論ではさまざまな事故や技術的な失敗の背後にある制度や組織といった社会的側面を解明しようとしてきた。これに対して炭鉱は事故や災害が多い労働現場として多種多様な技術的・制度的対処がなされてきた。しかしそれでも三池大災害を防げなかったということは、まさに科学技術社会論が対象としてきた「失敗」の典型的な事例であると言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保安技術や安全管理などの防災にかかわる技術・システムについて、組織内部の社会関係・社会意識に注目することで、技術やシステムといったハード環境を機能不全に陥らせてしまう組織文化・社会関係・社会意識の有り様を明らかにしようとするものである。そこで取り上げるのは、戦後最大規模の三池炭じん爆発CO中毒事故(三池大災害)を起こしてしまった三井三池炭鉱である。そして常葉大学付属図書館飯島伸子文庫に所蔵されている三池大災害の質的調査データを二次分析することで、事故を防ぐことに失敗した社会的原因を社会的に解明しようとしてみた。このように歴史的事件の再検証を通じて、保安・防災・安全という3.11以後の喫緊の社会的課題に社会学の方法から応えるものである。

3. 研究の方法

本研究で取り扱うデータは常葉大学付属図書館飯島伸子文庫に所蔵されている、飯島伸子による三池大災害調査の聞き取り調査データおよび文書資料を活用した。飯島は生前、三池大災害の現地調査を実施しており、事故の被害者およびその家族への聞き取り調査、文書資料の収集を行っている。そこでまずはオリジナル調査の問題関心を精査するために調査ノート、収集資料、飯島による自著論文の検討を行った。これによって飯島の問題関心は社会的・経済的な被害者救済にあり、保安意識・安全管理の側面は検討されていないことが見えてきた。そしてオリジナ

ル調査にはなかった視点として保安意識・安全管理の観点から、インタビューデータ、調査ノートを分析していく。さらに飯島の調査活動を追跡して裏付けるために大牟田市・荒尾市において現地調査を実施した。飯島の調査対象者本人あるいは親しい人物を追跡し、聞き取り調査を行うことで、二次分析で得られた知見を検証する。また調査対象者としては、坑内作業従事者だけではなく、坑外の事務系職員、経営部門の職員についても聞き取り調査を実施する。これによって労使双方から三池炭鉱における保安・防災・安全の組織文化・労働意識を解明していく。

本研究は、大きく分けると4つの段階を踏んで進められる。その段階とは(1)三池大災害に関する飯島調査資料の収集、(2)飯島調査資料に基づいたオリジナル調査の追跡調査、(3)飯島調査資料の二次分析(4)二次分析結果の精査と裏付けのための調査、である。これらは単線的に進むわけではなく、時に相互に往復することもあるが、基本的にはこの4つの段階にそって展開をする予定である。

(1) および(2)

飯島伸子は生前、三池大災害の現地調査を実施しており、事故の被害者およびその家族への聞き取り調査、文書資料の収集を行っている。本研究で取り扱う飯島調査データはそのような調査データであり、それらはすべて常葉大学付属図書館飯島伸子文庫に所蔵されている。そこで、飯島伸子による三池大災害調査の聞き取り調査データおよび調査ノート、そして飯島が収集した文書資料、飯島が刊行した研究成果である自著論文を必要に応じて複写し、分析に必要な形態に整理していく。また、申請者は本研究の申請に先立って、すでにインタビューデータなどは文字データに変換する作業(いわゆるテープ起し)を進めている。そこで文字データの形態を整理し、印刷・製本したうえで分析を行った。なお、このインタビューデータの分析にあたっては、質的データの解析ソフトの利用した。さらに飯島調査データと併せて文書資料の収集も行った。これは三池大災害そのものを理解するためのもので、飯島調査データの背後にある背景知識を深めるためのものである。この三池大災害に関する文書資料の収集のために、三井鉱山があった大牟田市・荒尾市を訪問し、公立図書館や歴史資料・郷土資料の情報センターを訪問し、必要な資料を収集した。

(3) および(4)

主な課題は飯島の調査データを補足し、裏付けるために大牟田市・荒尾市において現地調査を実施することである。飯島調査データの追跡調査によって得られた知見を飯島の調査対象者本人または親しい人物を追跡し、聞き取り調査を行うことで検証する。これは

飯島による社会的・経済的な被害者救済に関する研究成果の裏付けだけではなく、残された課題である保安意識・安全管理に関する補足調査という側面も持っている。後者の課題に対する調査対象者としては、坑内作業従事者だけではなく、坑外の事務系職員、経営部門の職員についても聞き取り調査を実施する。これによって労使双方から三池炭鉱における保安・防災・安全の組織文化・労働意識を解明していく。さらに本研究の仮説は、本来であれば社員教育によって保安・防災・安全に関する組織文化を生み出し、社員の心構えを形成するはずであったが、それに失敗したことが保安技術やシステムを機能不全にもたらしたというものである。そこで、三井鉱山の社員教育に関する制度や保安技術の教科書、安全管理マニュアルなどの資料を収集するとともに、社員教育といった観点からも当時の関係者へ聞き取り調査を行う。

4. 研究成果

(1) 飯島調査データについては、そのほとんどをテキストデータに変換することができた。それらを製本する予定であったが、当事者のプライバシーや著作権などがクリアできなかったため、製本は行わず、申請者個人の研究室で用いるためにファイリングするにとどめた。また飯島伸子が三池大災害について論じた文献・論文を常葉大学付属図書館飯島伸子文庫において収集し、オリジナル調査の意義と限界を検討した。

(2) 三池大災害に関する文書資料の収集のために、三井鉱山があった大牟田市・荒尾市を訪問し、公立図書館や歴史資料・郷土資料の情報センターを訪問し、必要な資料を収集した。

(3) 『Coal Mine Safety Service』の1955～1965年分をデジタル化し、アーカイブすることができた。また内容を分析したところ、事故の前後で大きな変化がなかったことが示唆された。戦後に起きた炭鉱事故の中では世界最悪と言われ、事故当時、社会的に大きな話題になり、地元住民にとっては忘れ難い負の記憶となっている。にも関わらず、炭鉱の保安教育を扱う専門雑誌に目立った特徴が見られないのは何を意味するのか(その変化を見落としている可能性もある)。

(4) 大牟田市は三池大災害の現場となった三川坑を保存し、文化遺産として活用しようとしている。この動きのなかで三池大災害がどのように記録されどのように表象されるのか調査するための準備を整えた。

(5) そのための準備として、歴史的遺産を活用したまちづくりを行っている小樽市を訪問し、歴史的遺産の活用によるまちづくりに取り組む市民団体の聞き取り調査を実

施した。またその市民団体が開催している歴史的遺産を舞台にした観光イベントの参与観察調査も行った。地域経済の礎となった小樽の歴史遺産であっても、時には小樽が衰退した象徴と見なされ、保存する声は少なかったという。そうした状況から、いかに市民の意識を変えていったのかという話を伺い、今後の大牟田市・荒尾市の方向性を予想することができるようになった。

(6) 三川坑をはじめ三池炭鉱を歴史的遺産として活用しようとする市民団体や現地関係者との信頼関係を構築し、今後も引き続き、調査に協力をしてもらえる関係を生み出すことができた

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

森久 聡、木村至聖著『産業遺産の記憶と表象:「軍艦島」をめぐるポリテクス』(2014年 京都大学学術出版会), 地域社会学年報, 査読無, No. 19, 2016, pp. 128-129.

森久 聡、松尾浩一郎著『日本において都市社会学はどう形成されてきたか 社会調査史で読み解く学問の誕生』, 大原社会問題研究所雑誌, No. 693, 2016, pp. 64-67.

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森久 聡 (MORIHISA, Satoshi)

京都女子大学現代社会学部・准教授

研究者番号: 20736649

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: